

漢詩で歳時記

村松暎

監修

詹滿江 著



漢詩で 歳時記

詹^{せん}満^{みつ}江^え
著

〈監修者略歴〉

村松 暎（むらまつ えい）

大正 12 年生まれ。昭和 25 年、慶応義塾大学文学部卒（中国文学専攻）。昭和 29 年、慶応義塾大学文学部助手、昭和 40 年、同大学文学部教授、現在、杏林大学教授、慶応義塾大学名誉教授。主な著書に『警説 史記』『中国列女伝』（中央公論社）、『中国三千年の体質』（高木書房）、『漢字に強くなる本』『ことわざに強くなる本』（日本経済通信社）、『漢詩の人間学』『儒教の毒』（PHP 研究所）などがある。

〈著者略歴〉

詹 満江（せん みつえ）

昭和 31 年生まれ。昭和 60 年慶応義塾大学大学院文学研究科博士課程満期退学（中国文学専攻）。昭和 63 年より杏林大学外国語学部中国語学科専任講師。主な論文に「甘露の変と詩人たち——李商隠を中心として——」（『日本中国学会報』第三十七集 1985 年 10 月）、「李義山恋愛詩試論——士大夫文学における位相——」（『杏林大学外国語学部紀要』第 3 号 1991 年 3 月）などがある。

漢詩で歳時記

1992 年 7 月 3 日 第 1 版第 1 刷発行

監修者	村松暎
著者	詹満江
発行者	江口克彦
発行所	P H P 研究所
東京本部	〒102 千代田区三番町 3 番地 10 第一出版部 ☎03-3239-6221 普及一部 ☎03-3239-6233
京都本部	〒601 京都市南区西九条北ノ内町11 ☎075-681-4431
印刷所	図書印刷株式会社
製本所	株式会社大進堂

© Ei Muramatsu Zhan Man-Jiang 1992 Printed in Japan
落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。
ISBN4-569-53669-7

監修のことば

俳句に「季語」というものがあるくらいで、われわれの詩は自然の移り変りに敏感である。だが、中国にだって四季はあるし、その時その時の花が咲いたり、暑かったり寒かったり、雪が降ったり春風が吹いたりして、それが人の感情にそれぞれ訴えるところがあるのは同じことである。それを詩人が歌ったのは当然である。

だからこれを春夏秋冬に分けて見ることもできる。漢詩を、そういう視角から眺めてみるのも一興ではないか。

日本人も漢詩を作ったのだから、日本のものも、いくつか入れてある。そこに中国人と日本人の自然に対する感性の違いがあるのかないのか、漢詩を作るという意識から、和歌や俳句と違った自然への想いが歌われているのかどうか、これも一つの興味である。その意味では、日本漢詩をもう少したくさん入れてもよかったかも知れないと思うが、なんと言っても本場の詩が多くなるのは当然である。むしろ、一つの集の中に、日本の作品も四季を歌ったという同じ

視点から、中国のものと混ぜて入れたところだが、この本の新味であるとして見てよからう。

四季それぞれに行事があり、冬の寒さ、雪、春になって花が咲く、夏の暑さや蟬の声、秋の紅葉と、季節の違いに、われわれはそれぞれ異なった想いを抱く。寒い冬が去って暖かい風が吹いて花が咲く。それに歓びを感じることもあり、この春も逝ってしまうのだという哀愁もそれに連なる。四季も常に同じ感想を持たせるものではない。そして、そういう想いは誰しも抱くものである。

それを詩人はすぐれた感性で見事に表現する。そういう意味で、詩人はわれわれのよき代弁者だと言えるだろう。思っているうまく表現できないことを、適切に言いあらわしてもらうというのは、快いものである。詩人独特の感性に触れるというのも詩を読むことの楽しみだが、同じ想いを巧みに表現してもらうのも、詩への共感として一つの快さである。漢詩は多く後者に属する。

西洋の詩には、われわれふつうの人間が思ってもみななかったような、いわば心の裏側、彼独特の感覚を歌ったものがある。それはそれで、新たな発見であったり、心を揺さぶられる驚きがあったりする。それも文学であろう。

だが、人格形成を目指す学問が主体の中国には、そういう詩は極めてまれである。新たな発見があったとしても、たしかにそうだと膝を叩く底のものである。

ことに四季の風物に感じて詠まれた詩には、詩人が特殊な境遇に置かれている場合があるとしても、その感覚は多く読者と共有のものであり、むしろ心の安らぎを与えるものである。これも文学であろう。

そこにはまた一つの陥穽がある。詩の持つ独自の感覚や思想的な特性が少なく、継承といった性格が強いとすれば、これを研究する場合に、勢い文献的な考証に走って、詩そのものが持つ感性、文学性を理解することを忘れてしまい勝ちになる。

中国の文学の特性として、文献的な考証は重要な意味を持つのであるが、そのために詩のイメージを捉えようとするこゝとさえ学問でないと考えるとしたら、これは文学としては奇形である。中国文学者には、そうした人が少なくないのである。

詹滿江^{せんみつえ}さんは中国詩の研究者として、文献的研究の方法論も十分身につけているが、それに満足してしまうことなく、それを踏まえた上で、彼女独自の感性で詩を捉えようとする。

漢詩の一般向けの解説書が、たいてい語句の解説に終始して面白さを欠くのに対して、この『漢詩で歳時記』が人を誘いこむ魅力を持つているのは、そのためであろうと思う。それは実は漢詩そのものが持っている魅力であって、彼女はそれを狭い研究者の領域から、広い読者と共有しようという自覚を持っているということであろう。

古典は学者の独占物ではない。ことに詩は本来的に「味わう」べきものである。漢詩は固苦

しいと思われ勝ちだが、この本は、そういう先入観を捨てて、気楽に楽しんでいただきたい。
著者もまた、気楽に楽しませることに成功していると思う。

村松 暎

漢詩で歳時記

目次

春

元日	12	田家元日／元日／秦少游	王仲至の元日立春に次韻す	三首其の一
立春	24	京中正月七日立春		
人日	26	人日帰るを思ふ		
上元	28	生査子		
早春	32	早春		
帰雁	33	帰雁		
梅	36	山園の小梅 二首其の一／梅花／雪中梅		
春分	41	春日田家 二首其の二		
二月	43	柳州二月／秦淮雜詩 二十首其の一		
江南の春	47	江南春		
燕	50	事に感ず		
鶯	52	曉鶯を聴く		
柳	54	元二の安西に使いするを送る		
海棠	57	海棠		
桃の花	58	桃花		

梨の花 60 梨花

寒食 62 寒食／春夜

清明 66 清明

上巳 67 三日李九の莊を尋ぬ

蝶 70 蝶

蛙 71 村夜蛙を聞く

桜 73 桜花

牡丹 75 牡丹を賞す

つつじ 77 宣城にて杜鵑花を見る／絶句

落花 83 春曉／如夢令

棟の花 86 新莊漫興

春の終わり 89 三月晦日劉評事に贈る

夏

初夏 92 初夏即事

小満 93 小満

ほととぎす 95 残月杜鵑

薔薇 97 山亭夏日

秋

初秋
七夕
中元

126 129 131

七月一日／秋懷
織女惜別
中元

木槿

123

隱者を訪ねて遇わず

蛩

120

蛩火を玩ぶ

避暑

118

香山避暑

滝

117

廬山の瀑布を望む

鮎

115

大堰川上即事

午睡

113

夏昼の偶作

三伏

112

夏日 悟空上人の院に題す

梅雨

110

梅雨晴る

蓮の花

108

野塘

百日紅

106

紫薇花

石榴の花

105

石榴

夏至

103

夏至の日の作

端午

99

夔州竹枝歌 九首其の一

蟬 133
蟬

朝顔 136
牽牛花

秋讀歌 138
秋詞 二首其の一

秋の夜長 140
秋夜 丘二十二員外に寄す

中秋 141
十五夜 月を望む

社日 143
社日

菊 145
飲酒 二十首其の五

木犀 148
叢桂

蟋蟀 150
虫を聞く

秋の夜の雨 152
夜雨 北に寄す／無題

秋の川 155
夜 墨水を下る

重陽 157
九日 藍田の崔氏の莊／九月九日 山中の兄弟を憶う／十日の菊

砧 164
子夜吳歌／秋興 八首其の一

秋の雁 168
秋夜 単飛雁を望む

蘆の花 170
江村の即事

紅葉 172
楓橋夜泊／山行

秋の終わり 176
九月尽く／秋尽く

冬

初冬

182

劉景文に贈る／山中

初氷

185

洛橋晚望

雪

187

夜雪／香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶東壁に題す／江雪／

江天暮雪／董大に別る／西湖雜詩 十七首其の二

冬至

199

邯鄲にて冬至の夜 家を思う／冬至の日 独り吉祥寺に遊ぶ

寒雀

202

寒雀

椿

204

山茶

十二月

206

河南府試 十二月樂辭 並びに閏月 十二月

臘日

208

臘日

討ち入り

211

四十七士

除夜

214

玉関にて長安の主簿に寄す／除夜の作／宮詞／除夜 石湖より茗溪に帰る

忘年

221

人に答う

あとがき

巻末資料（漢詩白文）・人名索引

装幀

藤枝リュウジ

春

元日

(がんじつ)

旧暦の元日は新暦よりも遅い。どのくらい遅くなるかは一定しない。旧暦の一カ月は、月の満ち欠けの周期によっているので、小の月が二十九日、大の月が三十日である。太陽の回帰周期（すなわち地球の公転周期）を基準とする新暦とは一年の長さが異なる。旧暦の一年のほうが新暦のそれよりも十日から十二日短い。

季節の移り変わりは太陽の運行、すなわち地球の公転周期によっているので、月の満ち欠けによる暦のままでと、季節がずれていってしまう。そこで、旧暦の場合、十九年に七回の割合で閏月うるしづきを置いて調節する。現在私たちが用いている新暦でも四年に一度閏年を設けて調節しているが、これは太陽回帰周期がぴったり三百六十五日ではないからで、ほんの微調整を行なっているわけである。しかし、旧暦の場合、微調整ではすまない。閏月を置いて調節するのであるから、最大一カ月のずれが生じることになる。

では、いつ閏月を置くか。その目安となるのは、二十四節気せちけというものである。夏至、冬至、春分、秋分といえ、いまの私たちにもなじみがある。夜と昼の長さの節

二十四節気

節 気	旧 暦	新 暦	中 気	旧 暦	新 暦
立春	正月節	2月4日	雨水	正月 中	2月19日
驚蟄	二月節	3月6日	春分	二月 中	3月21日
清明	三月節	4月5日	穀雨	三月 中	4月20日
立夏	四月節	5月6日	小満	四月 中	5月21日
芒種	五月節	6月6日	夏至	五月 中	6月22日
小暑	六月節	7月7日	大暑	六月 中	7月23日
立秋	七月節	8月8日	処暑	七月 中	8月23日
白露	八月節	9月8日	秋分	八月 中	9月23日
寒露	九月節	10月8日	霜降	九月 中	10月24日
立冬	十月節	11月8日	小雪	十月 中	11月22日
大雪	十一月節	12月7日	冬至	十一月中	12月22日
小寒	十二月節	1月6日	大寒	十二月中	1月20日

注：新暦の日付は年により一日の誤差があります。

数内 清著「増補改訂 中国の天文暦法」(平凡社刊)より

目となっていることを知っている。すなわち太陽を基準とした節目である。新暦の一年を四等分した場合の分け目である。こんな荒っぽい方は、天文暦法の専門の方からお叱りを受けようが、私自身素人のこととて、ご容赦いただきたい。

ごく大雑把ないい方で申しわけないが、夏至、冬至、春分、秋分という四等分をもっと細かくして、まるで丸くて大きなケーキでも切るみたいに、一年を二十四等分したそれぞれの分け目が二十四節気である。

新暦の一カ月には二つの節気があることになる。月の始めにあるのを節気といい、月の後半にあるのを中気ちゅうきという。夏至、冬至、春分、秋分などは中気であり、立春、立夏、立秋、立冬などは節気である。

新暦の場合、この二十四節氣の日付は一定している。閏年などの関係で一日の誤差はあるが。ところが旧暦となると、一カ月の中に二つの節氣がおさまらないことになったりする。そこで、節氣を目安に調節するのである。月の後半の中氣に注目し、その月にあるべき中氣がその月のうちに入らなくなったとき、閏月を置く。それゆえ、旧暦の元日は、十二月の中氣である大寒だいかんと一月の中氣である雨水うすいの間を動くことになるのである。新暦の日付でいえば、早いと一月二十一日ころになり、遅いと二月十九日ころになる。

旧暦の季節でいうと、一月、二月、三月は春である。新暦でいえば、二月ころからを春ということになる。まだ冬じゃないですかといわれそうだが、氣をつけてみると、梅の花は綻ほころびはじめ、日差しも心なしか明るさを増し、春の氣配が感じられなくもない。

田家元日でんかがんじつ

孟浩然もうこうねん

昨夜斗きくや北とへ回きたり